

甲子プロジェクト研究会の報告 —2021 年度

生活美学研究所研究員 黒田 智子

1. はじめに

甲子プロジェクト研究会は、2021 年度に 6 年目を迎える。設立の経緯と趣旨および 2016—2020 年度 5 年間の成果については前号にまとめた。今年度から新しい局面に向かっていると考えている。研究会における以下の目的および視点と方法は変わらないが、これを期に以下にまとめておく。

(1) 研究会の目的

近代建築の巨匠フランク・ロイド・ライトの愛弟子として知られる建築家・遠藤新は、自信作であるはずの甲子園ホテルの建築表現の意図についてあまり記述を残していない。遠藤は、若いころから筆が立ち、自らの作品はもちろん、ライトのチーフ・アシスタントとして献身した帝国ホテルをはじめ、当時の話題建築についても積極的に論じる建築家だった。また、甲子園ホテル完成時には、家族・親類知人と記念写真を撮り、尊敬する師・ライトへ手紙に添えて多くの建築写真を送っている。甲子園ホテルは、まぎれもない会心の作だったと思われる。したがって、記述が少ないことにむしろ注目し、甲子園ホテルの建築表現の意図を明らかにすることが、本研究会の目的である。

(2) 研究会の視点

甲子園ホテルの建築表現の意図については、僅かではあっても遠藤によって「語られたこと」がある。したがってそれを起点に考え、遠藤の真意を「語られなかったこと」の中に見出す。この道筋においては、遠藤が前後数世紀を空しくするとまで称賛した天才・ライトに倣い、その理念と方法である「有機的建築」の基幹をなすと思われる次の 2 点を視点とする。

- ① 建築と周辺環境、特に自然との調和：甲子園ホテルの敷地条件や周辺環境との関係を建築表現において明らかにする。
- ② 内側から外側に向かう (from within outward) 建築表現：次の二つが考えられる。②-1 建築という枠で生活を規定するのではなく、建築が内包する生活をモノとしての建築の形に先立って重視する。②-2 建築表現という目に見える存在の内側にあって表現を形づくる目に見えない存在がある。それこそが、通常の「建物」を「芸術」に高めていく建築表現の意図そのものととらえる。

(3) 研究会の方法—テーマについて

上記の視点にそい、関連分野から第一線、第一人者の方々にご講演頂く。研究会では、それを深め、甲子園ホテルの建築表現の意図の輪郭を徐々に明らかにしていく。これまでの研究会のテーマは、以下の 4 つに分類される。

- ① 敷地を含む周辺地域と建築との関係を明らかにすることを目標にした「甲子園ホテルの敷地条件」
- ② 象徴的表現の意味を考察することを目標にした「打出の小槌が担う信仰と象徴的表現」(ここに、宗教・信仰と建築表現の関係の考察を含む)

- ③ 遠藤と学生時代から交流があった甲子園ホテル支配人・林愛作をめぐる「日本の伝統美術の
とらえ方」
- ④ トマス・カーライルの『衣裳哲学』(Sartor Resartus, 1931-34)をめぐる「遠藤とライトの建築論」
についての解釈

2. 『衣裳哲学』の影響

今後の研究会は、(3)-④の『衣裳哲学』をめぐる考察が主なテーマになると考えている。それは、それに先立ち検討された(3)-①～③のテーマと切り離されたものではないので、そのことについて、概観しておきたい。まず、(3)-②・③の成果について、前号で報告したものを要約すると以下のとおりである。

4つのテーマのうち、②の打出の小槌に代表される建築装飾の象徴的表現と③の林愛作が詳しくあった日本の伝統美術は、もし、仏教美術を最高とすればその根底(表現意図)に神仏一体の密教があると考えられる。密教は秘密仏教の略で、その教義は、修行した出家にしか言葉として語れないというのが原則である。例えば、「日本美術の恩人」とされるアーネスト・フェノロサは、天台密教での受戒を果たしており、ある段階まで奥義に触れる資格があった¹⁾。そして、林は、山中商会時代(1900-1908)、晩年のフェノロサと親交があった²⁾。しかし、密教の原則からすると、林だけでなく、同様に俗世に生きる遠藤や、ライトが仏教の奥義を学ぶことは許されないと思われる。

一方、エマニュエル・カントは、『純粹理性批判』(1781-87)において、人間をとりまく世界を理性で扱える世界とそうではない、つまり理性を超えた世界(世界の起源、世界の果て、神の存在、魂の不死などが含まれる)に分けた。そして、その境界線に向かって、理性の世界を構築しようとした。境界線を越えた世界は、信仰が扱う世界でもあるので、その点は、密教において「語ることができるかどうか」の分別と類似していると思う。

この境界線を、トマス・カーライルは、『衣裳哲学』の第二巻において、自らの体験を物語ることを通じて越えて見せた。その『衣裳哲学』にライトと遠藤とが別の場所・時期において深く影響を受け、帝国ホテルの設計で林を介して出会ったと考えられるのである。見方を代えると、密教においては語ることを禁じられていることが、『衣裳哲学』の第二巻では、カーライルの言葉によって語られていると捉えることができる。また、『衣裳哲学』は、出版からおおよそ90年後も挿絵入りが出版されるようなロングセラーだった。それぞれ影響を受けた3人がそれぞれの立場から信仰を基盤に、日本の新しい空間表現を目指して帝国ホテルの設計に関わるという関係が見えてくる。したがって、『衣裳哲学』とライト・遠藤の建築論との関係をテーマとすることは、②と③のテーマへの働きかけになることが期待されるのである。

さて、カーライルの考えは、『衣裳哲学』に使われた言葉「超越主義(transcendentalism)」とともに、少なくとも1933年以来ラルフ・ヴァルド・エマーソン(1863-1882)の心を捉えた(後述)。そして、この言葉を名称として掲げた文学・政治・哲学の運動³⁾を起こすに至る。ライトは、同じユニタリアン派としてエマーソンの著作を好んだことが知られている。一方、ライトは、『アーキテクチュアルレコード誌』に発表した「建築のために」(In the Cause of Architecture, 1908)において、建築家としての精神的危機を乗り越えた書物として『衣裳哲学』をあげている⁴⁾。ここには、『衣裳哲学』からの直接の影響と、エマーソンの著作からの信仰を基盤とする影響とが見られると思う。

一方、ジョン・ラスキンからウィリアム・モリスに至る中世を理想とした生活と労働と芸術の関係が、アーツ・アンド・クラフツ運動に受け継がれ、シカゴにおいてもアーツ・アンド・クラフツ協会（1897）が設立した。ライトは、この協会に参加して活動していたが、ラスキンとモリスもまた、カーライルに影響を受けていたことが知られている。したがって、ここでも、『衣裳哲学』の直接・間接の影響が推察される。

つまり、ライトは、カーライルから、エマーソン経由の宗教・文学・政治・哲学と、ラスキン、モリス経由の生活環境の創造との両側面から2重に影響を受けていると言えるのではないだろうか。前述の「建築のために」（1908）においては、ライトが、『衣裳哲学』を仲間たちと分かち合ったことが読み取れる。つまり、『衣裳哲学』は、ライトの近傍において、エマーソンとモリスによるそれぞれの、運動との関連で共通に読まれる書物だったと考えられるのである。

遠藤の場合は、仙台第二高等学校時代、英語教師で詩人であった土井晩翠を通じてカーライルに出会ったことが分かっている。土井は、遠藤が入学した1911年頃、『衣裳哲学』の翻訳をしており、遠藤の三男・遠藤陶氏によれば、遠藤が建築家を志したのは、土井の影響だとしている⁵⁾。そして土井は、東京帝国大学時代、小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）のもとで学んだ。小泉には、「カーライルの『衣裳哲学』について」という論考があるが、内容から当時の講義録（小泉は1896-1903年東京帝国大学で教鞭をとった）と考えられる。学生であった土井は小泉を通じて、カーライルに出会い、そこから『英雄崇拜論』、次に『衣裳哲学』を翻訳したのであろう。

つまり、遠藤の場合は、東京帝国大学の小泉と土井の師弟関係という水脈を通じて、土井から仙台第二高等学校時代に『衣裳哲学』の影響を受けた。当時の土井は洋行帰りの名物教授であった。遠藤をはじめ、多くの学生が影響を受けたと想像される。

明治期の日本において、『衣裳哲学』に早くから影響を受けた著名人としては、内村鑑三（1861-1930）、新渡戸稲造（1862-1933）、夏目漱石（1871-1952）、前述の土井晩翠（1850-1904）があげられるが、そこに小泉八雲も加えることができるだろう。彼らは、みな、何らかの形で教職についてので、次世代の若者にも影響があったと考えられる。その中の一人が遠藤新である。遠藤は、いわゆる立身出世を求め第一線に出ていくタイプではなかったといわれる⁶⁾。しかしながら、帝国大学建築学科に進学し、ライトを支えて帝国ホテルを完成させたこと、専門誌に自らの論考を投稿したことなどから、建築界において注目されていたと考えられる。これらを考えあわせると遠藤の論旨の根幹に、『衣裳哲学』があると読み解くことができた読者の存在もまた期待できるだろう。

一方、巨匠フランク・ロイド・ライトが、『衣裳哲学』に影響を受けたと1908年の「建学のために」において自ら記述していることは、ライトの近傍の人々とは別に、その名声の高まりと共に本書に当時の欧米の建築界の注目が集まったことを示唆していると思う。『衣裳哲学』の建築界における影響は、これまであまり明らかにされていないので、併せて研究会の展開が期待される。

3. 『衣裳哲学』における「心身」と「衣服」の二元論

『衣裳哲学』（1833.11-1834.8）は、19世紀スコットランドの歴史家・評論家・思想家トマス・カーライル（1795-1881）による著作で思想・哲学的な内容で知られている。しかしながらそれは、哲学書ではなく文学作品であることに注意を要する。産業革命以降、資本主義の発展により産業構造、生活様式などが変化し貧富の差が顕著になった19世紀のイギリスで、本書は、教会から離れていった知識人の心の拠り所となったとされる。

現在この著作が話題になることは稀であり、忘れられた存在だといえるだろう。カーライルが雑誌『フレイザー』に連載していた頃（1931-1934）は、すぐに単行本になるほどの読者は見込めていなかったようである。当時のイギリス社会には革新的であり過ぎたのが理由とされる。前述のエマーソンの働きで、先にアメリカでの出版（1936）を実現したことも、両国の社会意識の違いを示していると思う。その2年後には、イギリスでも出版（1938）され、次第に読者が増えていったようである。世紀転換期つまり、初版から60年以上経て、小泉八雲は、「毎年読者が増え、新版が発行されている。ついに最近では80枚の絵が入った挿絵版まで現れた。」とのべている⁷⁾。さらにその後1926年、つまり、最初の連載から92年後も挿絵付きの出版があったことが確認される。社会の関心を集めたロングセラーだったといえるだろう。

前述のように、欧米では、アーツ・アンド・クラフツ運動、特にアメリカではエマーソンの超越（絶）主義に基づく、文学・政治・思想運動、日本では、内村や新渡戸の農政・社会運動、夏目、土井、小泉の文学活動、さらに彼ら全てが携った教育活動などから直接・間接に影響があったと考えられる。そんな中で遠藤とライトに視点を絞ると、建築界での影響が想定されるのである。

さて、もし、カーライルによる「衣服」を「建築」に置き換えて「建築」や「建築様式」を構想するのであれば、モデルとしての「心身」と「衣服」の関係を整理する必要がある。先に、カントが理性で語るができないとした世界と宗教において「語るができないこと」との共通性について概観した。ここでは、「心身」と「衣服」の二元論に着目し、その特徴について考察する。先行研究としては、国内カーライル研究の第一人者と目される向井清の著作を中心に参照する。

『衣裳哲学』は、「心身」と「衣服」の関係を、文明論的側面と、超越的側面から事物の説明に用いている。まず、文明論的側面としては、「心身」と「衣服」の2元論によって、政治、文化、芸術、宗教など、人間が文明の名のもとに生み出すあらゆる事物について、見えない内側・中味を「心身」、見かけの外側・外観を「衣服」として両者の関係をモデルに説明している。このことを前提として超越的側面としては、「心（魂・精神）」と「身体（肉体）」、「神」と「自然」、「神」と「宇宙」など、人間の手に依らず、人間には計り知れない文明を超えたという意味で広大無辺な存在の説明に用いている。それによって「心身」と「衣服」の関係を「神」または「神性」を視点に評価しようとする。ここに、カーライルの社会進化・社会改革の姿勢と、その方向性がみえてくるように思う。

カーライルは、“transcendental”という言葉を多用している。また、カントに影響を受けたことを認めている。カントは、理性で説明できない境界線の在る所まで、理性の世界を構築するためにこの語“transcendental（英）、Tranzendental（独）”を用いたことで知られる。しかし、カーライルは、境界線を越えた世界の存在を語るために用いているところが大きく異なる。なお、カントについては、一般的にこの語は「超越論的」と翻訳されている。

さらに、『衣裳哲学』では、‘Transcendentalism’という言葉も、よく用いられている。超越主義または超絶主義と訳されるが、先に触れたように、19世紀のアメリカにおいて、エマーソン（1803-1882）を中心に起こった文学・政治・哲学の運動の名称である。向井清によれば、運動の初期においては、カーライルとエマーソンの交流があったことが知られており注目される⁸⁾。1833年、スチュワート・ミルの紹介でエマーソンが初めてカーライルを訪問以来、二人は交友があった。『衣裳哲学』が、本国より2年先の1836年にアメリカで初版刊行されたのは、エマーソンの助力によるとされる。同年、エマーソンは、評論「自然（nature）」（1836）にはじめて‘Transcendentalism’

を打ち出したという。カーライルの、『衣裳哲学』中の‘Transcendentalism’への共感からだとも推察される。したがって、カーライルが用いる‘transcendent’は、超越的または、超絶的と翻訳するのが適切と思われる。土井晩翠は、『衣装哲学』においてこの語を「超絶的」と翻訳している。

さて、「神」は人間を「超える」存在である以上、畏敬を呼び起こすのだから、人間が簡単に近寄りがたいと思われる。しかし、カーライルによれば、誰もが心の中に「神性」を持っており、それは宇宙を「衣服」として纏う「神」と質的に同じであるというのである。それは、「歓楽ではなく神を愛する」という心の状態であり、「無限の慈愛を他者に向ける心の状態」として喜びと共に感得される。それを、哲学的論述ではなく、心の状態の経験的瞬間として文学という方法で描いているのである⁹⁾。

さて、カーライルは、キリスト教を最高の宗教と位置付けているが、他宗・他教を排除しているわけではない。『衣裳哲学』が難解であると批判されたことから実施した講演会の内容をもとに出版した『英雄崇拜論』(1841)では、北欧の神や、イスラム教の開祖マホメットが取り上げられている。なお、小泉八雲が、『衣裳哲学』において文豪ヴォルフガング・ゲーテの『ファウスト悲劇第1部』(1806)から引用された「地霊の歌」を「仏教的」と評している¹⁰⁾ことを付記しておきたい。カーライルは、ゲーテを翻訳し、晩年のゲーテと文通し、『衣裳哲学』にも、ゲーテの引用が多いのだが、この詩は、地霊が神の衣を織るところを謳ったものである。ここにおける衣(自然)と神と肉体は、その文脈から「衣服」と「心身」の二元論によるものの見方の基底をなしていると思う。小泉によれば、そもそも見えるものの背後に見えないものがあるという捉え方自体が仏教的だということである。アイルランド人の父、ギリシャ人の母を持ち、西欧が出自の小泉の言説として注目される。また仏教では、誰の心にも「仏性」がある(悉有仏性)というが、「仏性」を「神性」に置き換えるとまさにカーライルの言説となる。このことも、仏教との共通性として注目されるのである。

さて、カーライルが理想とする「無限の慈愛を他者に向ける心の状態」を目指す人々の社会は、必然的に世界平和を目指す。カーライルは、産業革命による資本主義社会において生まれた貧富の差においても、『衣裳哲学』において注視しているが、人類の歴史と共にある戦争についても同様である¹¹⁾。19世紀のイギリスは、植民地をめぐる戦争が絶えず、明治期の日本も維新、西南戦争、日清・日露戦争があったことを背景としてみておく必要があるだろう。

4. 「衣服」から「心身」への洞察

『衣裳哲学』は3巻から成り以下のような構成になっている。

第1巻：「心身」と「衣服」の二元論¹²⁾によって古今の事物について検討・考察し、「衣服」の背後にある目に見えない「心身」のうち「心」の性質・特性の深さを暗示する。

第2巻：「神性」についての自らの体験から理性を超えた世界を明かす。

第3巻：現代(当時)の世相を、第2巻の「神性」に基づいて批判、その判断を読者に委ねつつ人類の未来の方向を示す。

まず、第1巻は、「衣服」から「心身」を洞察する、つまり、目に見えるものから、それが実は何であるのか、背後にある目に見えないものを洞察することから書き起こされている。小泉八雲によれば、「仏教的」な側面である。その意味で「衣服とは何か」、その本質を問うが故に、衣服の哲学なのである。『衣裳哲学』の原題は、『サーター・リザータス』で、ラテン語で「仕立て直

された仕立て屋」という意味である。しかしながら、『衣裳哲学』という邦題があたえられるのは、そのような理由からである。そして、「衣服」の本質は、その背景の「心身」、つまり、人間を「身体」だけでなく、内面に「精神・心・魂」を併せ持つ存在としてとらえねばならないことを第1巻から暗示する。さらに「精神・心・魂」の中に、誰もが「神性」をもっており、それが心を支配すると、心は真に理想の状態に近づくとするのが第2巻である。

第2巻は、主人公の青年時代の体験として、仕事も恋人も失った主人公が、自殺を考えるほどに苦しむ中、幼少期の信仰の力で、やがて死を恐れるだけの小さな自分に気がつき、自己の中の「神性」に目覚める。それは、「歓楽ではなく神を愛すること」であり、「無限の慈愛を他者に向ける」心の状態として喜びと共に感得される。自分は一人ではない、と感じ、目の前のすべての事物、風景に、同じ神性を感じそれゆえに喜びを感じるのである。これは、誰もが経験し恐れもする絶望という心の状態の中に、まさにどん底から立ち上がり、一筋の希望を見出す過程であり、客観的・哲学的論述ではなく、心の状態の経験的瞬間として描いている。

第2巻は、誰にも仏性があり自我を捨てその仏性つまり真我・如来我に至る道があるとする仏教の諦観や悟りと類似している。廃仏毀釈でやはり心の拠り所を失った日本人が、近代化と西洋化が同義である時代にそのような文化の根本を知り、拠り所求める。『衣裳哲学』は、そんな日本の読者の要求に適っていたのではないかと思う。

第3巻は、第2巻で読者の側が文学的共感によって知り得たであろう「神性」つまり、「無限の慈愛を他者に向ける心の状態」を判断の基準とすれば、当時の世相をどのように評価できるかを読者自身に問う。そして、未来の方向性の選択肢を示す。それは、前述のように平和な社会であり、人びとが心身とも健康な世界への進化・発展である。それは、度重なる戦争で一見不可能と思われる時もあるが常に次の時代への顕現を順備する「不死鳥」のような顕れであること、それを意味する「象徴」は言葉では説明できないこと、過去・現在・未来は人間が「働き、話し、考え、感じる」ことで引き継がれる「有機的繊維」で織りなされることなどが語られている。そんな未来を創るクリエイターとして「人間」のために「衣服」をつくる「裁縫師」の概念も記されている。

土井晩翠は、当時のイギリスの世相やヨーロッパの歴史や文化に教養がないと良く分からない、つまり難解とされる『衣裳哲学』を、第1巻から順に読むのではなく、第2巻から読むようにそれぞれの言説において薦めている¹³⁾。読者の心の底に訴える第2巻が要となるこのような3巻の構成ゆえと考えられる。

それに沿うと、「衣服」を「建築」あるいは「建築様式」に置き換えて構想し、創造するには、第2巻を前提としつつ、まず、「人間にとって建築とは何か」を考える必要がある。建築家であれば、第3巻を視野に入れて現在と近未来の「建築」を考える、ということになると思う。遠藤やライトが辿った道ではないかと思う。また、アメリカ独自の建築様式を模索したライトが辿り着いた「有機的建築」は、単に「有機的」の単語の共通性だけでなくその意味においても、「有機的繊維」と呼応していると推測される。

5. 展望

遠藤新は、土井晩翠を通じて『衣裳哲学』に出合った。そして、東京帝国大学を卒業後は、「心身」に適う「衣服」をつくる「裁縫師」として、「国民」に適った「建築」をつくろうとしていたことが¹⁴⁾言説から伺える。それ故東京帝国大学建築学科に進学した。そして3年生の演習で帝国

ホテルを見学した時に支配人・林愛作にであう。正式な契約はまだだったが、1913、4年頃とすれば、すでに林の意中には新帝国ホテルの設計者とはライトであったと考えられる¹⁵⁾。ホテルの最高のユーザーとしての支配人のもとで、遠藤は、卒業設計のために、自分だったら帝国ホテルをどう設計するか、という姿勢で取り組んだ。一方、卒業設計においてあこがれのライトの作風を視覚的に取り入れたところが無い。このことは『衣裳哲学』の精神を端的に示していると思う¹⁶⁾。そして、卒業論文には、すでに後の「建築論」の萌芽が見て取れる。

当時の遠藤は、帝国大学で建築を学ぶ学生である。それまでの建築教育にも視線を向ける必要がある。

教授陣として注目されるのは、伊東忠太(1867-1954)である。伊東は、遠藤に卒業後の読売新聞への連載記事の投稿や、明治神宮造営局への就職などに力添えしたとされる。そして、伊東は先に見た『衣裳哲学』の読者の世代に含まれる。しかも、伊藤の卒業論文は、「建築哲学」なのである。筆者は一度、東京大学工学部の図書館で「建築哲学」を閲覧したことがあった。今でいう日本建築の様式の整理を試みている。他の論文と違い、筆で書かれ分冊だったことは、後の遠藤の時代まで、論文は英文であることから、印象に残った。後に造家学科を建築学科に名称変更することを唱えた伊東の根幹に「建築哲学」つまり「建築とは何か」を問う若き日の姿が見えてくる。その後伊東は、当時の研究者には珍しかったアジアを探訪し日本建築のルーツについて説いた。それは、「衣服とは何か」を「衣服」を通じて問う『衣裳哲学』特に「第一巻」に呼応する姿勢ではないかと思う。

また、伊東は辰野金吾のもとで建築を学んだが、辰野の師であるジョサイア・コンドル(1852-1920)の影響があったといわれる。コンドルは、お雇い外国人として日本に来て建築学科の最初の教授となった。日本人を妻とし、日本文化に造詣が深く、河鍋暁斎に師事して日本画を描いた。そのコンドルが、日本に来て建築とは別に最初に研究したのは着物についてであったことを、山口静一の研究を通じて知った。これから長きにわたり教育に携わる日本人を知るために「着物」つまり日本人の「衣服」に注目しているのである。コンドルは、『衣裳哲学』の初版の際、10代、その後読む機会は多い世代に含まれる。カーライルと同じスコットランド人であるだけに、気になるところである。様式建築の教育を期待されて日本に招聘され、ニコライ堂、三菱一号館など当然ながら、西洋由来の様式建築を実現した。しかしながら、可能かどうかは別として、もし、『衣裳哲学』を深く読めば、日本にふさわしい建築様式とは何かを、考えないではいられない立場にあったのではないかと思う。

このようなことから、2021年度第1回は、伊東忠太の研究で博士号を取得され、伊東が遺した資料の解説書を出版された倉方俊輔先生(大阪公立大学)に「伊藤忠太の建築進化論の形成過程と思想的特質」と題してご講演をいただいた。

また、ライトや遠藤がそれぞれ、アメリカと日本にふさわしい様式を探求したのが、「建築とは何か」、「様式とは何か」を問う時代であれば、これについても考える必要がある。実際、帝国ホテルは「ライト式」と呼ばれ様式のひとつとして受け取られたことだけを取っても、必要ではないかと思う。ライトにとっては、バリ・ボザール由来のルネッサンス様式が目の前にあり、それは、エマーソン流に言えば、アメリカ独自の文化と対立していた。また、遠藤にとっては、近代化がそのまま西洋化として導入された諸様式と、そもそも日本らしい様式とは何か、という議論とに、特に「新帝国ホテルの設計」という課題として直面していた。二人とも、そんな「様式」に対し、「どの「様式」を選ぶか、ではなく、「様式」とは何か」が重要なのだと述べている。つまり、カー

ライル流に言えば、「人間」にとって「建築様式」とは何か」ということではないか、と思う。

一方、『衣裳哲学』においては、建築の「様式」を、衣服の流行と同等に扱ったり、また一方では、直接、教会建築と名ざすことは無いが、崇高で特別な存在として扱ったりというふうに登場する。

様式概念自体は、西洋においてさえ、19世紀に整えられたという。そうであるならば、カーライルの時代感覚や真意を把握するにも、様式の理解は一筋縄ではいかないように思われる。

通算、第11回目の研究会は、普段の研究会とは趣を変え、勉強会という形式で、建築論、建築史ご専門の皆様にお声がけした。広くは、遠藤新の「自然や景観を大切にし、さらに世界平和につながる建築」という本プロジェクトの成果を次の世代に伝えることに、極めて微力ながらも力を尽くせたら、という気持ちからである。

講師として、田路貴浩先生（京都大学）をお招きし、「様式」をめぐる幾つかの視点」と題してお話しいただいた。田路先生は、「フランス・ルネサンス期の建築家フィリベール・ドイ・ロルムの建築論研究」で学位を取得された。西洋の様式について建築論の立場から深く考察されておられる。そして、既存の様式からの分離を唱えたウィーン分離派に倣い日本で結成された分離派建築会にお詳しく、近年、京都近代美術館にて、展覧会を開催、昨年は『分離派建築会 — 日本のモダニズム建築誕生』（2020）をご出版された。分離派建築会のメンバーは遠藤新に続く世代であることも添えておきたい。また、設計も手掛けられ、奈良県桜井市大神神社（おおみわじんじゃ）の「三輪山会館」能楽堂を設計され、実践を通じて日本の伝統建築についても、深い造詣をもたれておられる。

今後の甲子プロジェクト研究会の新しいスタートを切るのに重要な議論の場を頂いたと思う。

注釈

- 1) 参考文献 12, pp.437-437,438 アーネスト・フェノロサは、ウィリアム・スタージェス・ビゲロウとともに、1885（明治18）年、園城寺（三井寺）法名院の櫻井敬徳より戒を受けた。園城寺は天台宗の寺院で、二人の墓は、法名院寺域にある。
- 2) 参考文献 13, pp.145,146 フェノロサは、1907年、山中商会主催の連続講演会において、「中国・日本美術の各年代」と題して、ニューヨークの American Institute Hall において12講を持っている。そのパンフレットには、中国と日本の400名の画家の漢字名、生没年・活動期間が記されている。作成には、当時実質上の商会主任だった林愛作が献身したことが、フェノロサの謝辞から伺えるという。翌年、林は、フェノロサのヨーロッパ遊説に随行し、ロンドンで急死し火葬したフェノロサの遺骨を遺志に従って日本に還送、園城寺にての埋葬・法要に有賀長雄と共に尽力した。同時に二人の協力により、フェノロサの『東亜美術史綱』（有賀長男訳、1921）の出版が実現した。
- 3) 参考文献 20
- 4) 参考文献 21
- 5) 参考文献 16、1993.07.12, 07.26 遠藤陶によれば、遠藤新は、仙台第二高等学校時代、土井晩翠を通じて、カーライルの『衣裳哲学』と『英雄崇拜論』に強く影響を受け、授業時間以外にも質問を浴びせ、たびたび土井邸を訪ねるほどだったという。また、遠藤は、すべての科目が優秀、文章と絵画の才能があった。医学か工学が進路を決めかねていたが、土井晩翠の影響で思考が哲学的になっており、自らがもてるすべてを社会に活かすのに建築という分野があり、建築を芸術に高める決意をしたことなどを記している。

- 6) 遠藤陶は、遠藤新が、帝国ホテルの現場でライトから「切り札のジャック」と呼ばれるほど頼りにされたと、ライトの自伝からの引用している。参考文献 16、1994.01.31
- 何度も施工のやり直しを命じたライトにとって、チーフアシスタントで、日本語と英語の両方を解する遠藤の存在抜きに、帝国ホテルの現場は進捗しなかったと考えられる。一方、管見ながら、遠藤の遺した記述からは、そんな要の存在であったと自らを語る箇所は見出せない。ライトを尊敬し師と仰ぐ謙虚な姿勢に貫かれている。
- 7) 参考文献 14、p.262, ll.8-14 小泉八雲は、『衣裳哲学』を、文豪ゲーテの『ファウスト』に比して人々に読まれるべき書物としており、そうなりつつあることのあかしとして「80枚の絵の入った挿し絵版」を挙げてみせている。
- 8) 参考文献 3、pp.110-113 エマーソンとカーライルの交流の発端と40年にわたる交流は、以下に詳述されている。
- 9) 3) において、考察している。
- 10) 参考文献 14、p.264, ll.11-15 小泉八雲は、『衣裳哲学』の第1巻第8章「脱衣の世界」に引用された『ファウスト』における地霊の歌を改めて引用し、「この意味するところは、もちろん、現象の世界は目に見えない無限者の目に見える衣服に過ぎないというものであって、本来これは全く仏教の思想である。しかしながら物質の神秘を考慮に入れれば、これはまた科学的事実としても全く真実である。このようにして、世界のあらゆる大思想は一致している。(中略) 衣裳の哲学はこの本の冒頭の第1章(第1巻の意、筆者)に述べられている」とゲーテの地霊の歌の意味するところを『衣裳哲学』の本質として捉えている。
- 11) 『衣裳哲学』第3巻第7章「有機的繊維」に述べられている。筆者は、参考文献3に置いて考察した。
- 12) 『衣裳哲学』第1巻で、「衣服 (Clothes)」の洞察は、「人間 (Man)」との関係において、二元論的に検証している。そして、「人間」はさらに「心身」として捉えられ、特に「心」が宿す「神性」と「衣裳」との関係を究極とする。また、「神性」とは、「神」とは同質であるとし、「神」の衣服としての「自然」については、10) に述べたように、すでに、第1巻第8章においてゲーテの地霊の歌の引用で暗示している。
- 13) 参考文献 15、例言 土井晩翠は、本文を読む前の読者に、「緒言、はじめに」に当たる箇所で述べている。一方、小泉八雲の場合は、講義原稿であることからであろうか、聴講する学生の混乱を避けるために、『衣裳哲学』における順序に沿ったと述べている。pp.3, ll.1, 2、参考文献 14、p.263 いずれにしても、第2巻の特殊性ばかりでなく、主題にとっての本質性、重要性を指摘していることは共通である。
- 14) 遠藤は、「東京駐車場の感想」(1915、読売新聞、1915.01.31)において、次のように述べている。「ラスキンが国民芸術のために叫んで、国民一般の芸術に時する理解よりも、芸術家の国民を理解せんことを要望した、我が国はこんな生ぬるい叫びに満足できるようなのきな事情ではない、未だ根本の国民生活が確定していないのだ。(中略) 建築家はもはや、在来のスタイルという言葉によって論議せらるるような一面的な建築対境を通り越して、一時加える能わず一字を減ずる能わざる底の生活に徹底した緊密不二の建築の醍醐味を了しなければならぬ。」
- 上記には、既存の「衣服」に「人間」を当てはめるのではなく、「人間」のために「衣服」をつくるというカーライルの考え方が援用されていると思う。つまり、「人間」を「国民」に、「衣服」を「建築」に置き換え、「国民」のために「建築」をつくる姿勢を打ち出している。それは、

既存の様式に「国民生活」を当てはめるのではなく、「国民生活」と緊密に一体化した建築なのだが、日本では「国民生活」さえ確定していない、と、責任感と共に焦燥感を表していると思う。

- 15) 参考文献16, 1993. 08.18 遠藤陶によると、遠藤新が林愛作にあったのは、1913年である。「大正2年、帝大建築科であった遠藤新君を知る。」という林のメモが根拠と考えられる。遠藤は、林に会う前からライトの著作を見て憧れており、この時、林が新帝国ホテルのためにライトと接触していたことを知り胸が躍ったとも記している。

谷川正巳は、この時期のライトと帝国ホテルの関係を、浮世絵収集家としてのライト、最初の帝国ホテル案を依頼された下田菊太郎と林愛作との関係を視野に考察している。参考文献18、pp.139-142

1913年は、下田菊太郎が新帝国ホテルの略設計図を提出して林愛作に厚遇された1911年から、ライトが正式に帝国ホテルの設計者に決まった1916年の間に位置している。谷川はまず、ライトは、1911年に日本美術愛好家で富豪フレデリック・ゲーキンから、ライト宛てに新帝国ホテルの設計者としてライトを推薦し、林が前向きな返信をよこしたことを書いた手紙から、すでにこの年、林とライトの繋がりができていたことに注目している。そして、1913年、ライトはチェイニー夫人を伴って来日、富豪スポールディング兄弟のために大量の浮世絵を収集している。谷川は、その際、ライトが帝国ホテル側と新ホテルの設計について折衝をした可能性を指摘している。

さらに、谷川は、帝国ホテルの練習台的位置づけとされるミッドウェイ・ガーデンズ (1913-1914) が下田案を下敷きにしている可能性を指摘している。参考文献19, pp.81-84 このことは、1913年が、設計者がライトに決まりつつあったと推察される要因となるし、先にあげた遠藤との言説、つまり、遠藤と林の出会い時期と遠藤が示したとされる強い関心と矛盾がないと思う。

- 16) 欧米の様式建築・瀬中様式あるいは最新流行の受容は、1920年代後半のモダニズムまで続く日本建築界の特徴である。一方、遠藤の卒業設計 (1914) は、ライトの作風の外見的特徴が見られない。遠藤自身が、「かつて自分が学校を出る頃アメリカに移行など考え、行けば雑誌で見たライトさんにと志して (『ライト自伝を読む I』 (1948)、建築家 遠藤 新 作品集、1991, p 201, 下段 II.2.3) と自ら述べているからにはどんな作風かを把握していたはずである。そうであるならば、遠藤は、当時の潮流と異なり、意識してライトの模倣を避けたと捉えられる。それは、「衣服」に「人間」を当てはめるのではないという姿勢に添い、14) の考察と一致する。

一方、遠藤の卒業論文からは、「人間」から「衣服」をつくるように、ホテル滞在時の「生活」からホテルの「建築」をつくる姿勢が読み取れる。そのために、ホテルにおける「生活」の「理想」として、迎賓館ホテルとして世界平和を目指し、海外宿泊客の生活を重視し、生活様式はもちろん、立地条件、複雑なホテル業務の動線などを検討している。「生活」の「理想」は、「人間」の「心」の「神性」に対応すると捉えられる。そのために、ヨーロッパでも1920年代に検討された動線計画を1914年に行っている点も注目される。これらのことは、参考文献22において筆者が考察している。

それは、14) に示した「東京駐車場の感想」の前年、それに先立って『衣裳哲学』第3巻の内容の建築設計における実践ととらえられる。

参考文献

1. 向井清、衣裳哲学の形成－カーライル初期の研究、山口書店、1987
2. 同上、トマス・カーライルの研究－文学・宗教・歴史の融合－、大坂教育図書、2002
3. 同上、トマス・カーライルの人生と思想、大阪教育図書 2005
4. Steven Helmling, *The Esoteroc Comedies of Carlyle, Newman, and Yeats*, Cambridge University Press, 1988
5. イアン・キャンベル著、多田真三訳、トマス・カーライル、成美堂、1981
6. 石田憲次、カーライル研究、弘文堂書房、1923
7. 佐久間操、カーライルの思想及び評伝、洛陽堂、1921
8. トマス・カーライル（著）、宇山直亮（訳）、衣服の哲学、日本教文社、2014
9. 同上、土井晩翠、鬼臭先生衣裳哲学、大日本図書、1907
10. Thomas Carlyle, *Sartor Resartus*, Oxford, 2008
11. 山口静一（編）、ジョサイア・コンドル 英文著作および関連資料集成
12. 山口静一、フェノロサ 上－日本文化の宣揚に捧げた一生、三省堂、1982
13. 同上、フェノロサをめぐる－林愛作と柳田暹英－、武庫川女子大学生生活美学研究所紀要 第 29 号、2019, pp.143-153
14. 小泉八雲（著）、池田雅之他（訳）、ラフカディオ・ハーン著作集 第 6 卷、恒文社、1980
15. トマス・カーライル（著）、土井晩翠（訳）、衣裳哲学、大日本図書、1909
16. 遠藤陶、遠藤新物語 1-79, 福島建設工業新聞、1993.05.17-1994.12.19
17. 同上、ライト館の幻影 孤高の建築家 遠藤 新 の生涯、廣済堂、1997
18. 谷川正巳、フランク・ロイド・ライトの日本 浮世絵に魅せられた「もう一つの顔」、光文社、2004
19. 同上、フランク・ロイド・ライトとは誰か 王国社、2001
20. 黒田智子、『サーター・リザータス』における「心身」と「衣服」の二元論についての考察－「衣服」を「建築」に置き換える前提として、日本建築学会近畿支部研究報告集 62, pp. 469-472, 2022-06
21. 同上、フランク・ロイド・ライトの「建築のために」におけるトマス・カーライルの『衣裳哲学』の影響、日本建築学会学術講演梗概集 2021、pp.105,106, 2021-07
22. 同上、遠藤新の卒業論文「シティホテル設計の解説」における三つの理念、日本建築学会近畿支部研究報告集 61、pp.425-428, 2021.06